

# 女性の労働市場再参入に関するコーホート比較

—家族と個人による調整から家族と産業による調整へ—

大和礼子

(関西大学社会学部)

Changes in Women's Reentry into the Labor Market

Reiko Yamato

キーワード：女性の職歴、コーホート、労働市場、ライフサイクル

## 1. 問題の所在：女性における家族経歴と職業経歴の対立と調整

森岡(1988)は、現代の女性が直面している問題を、家族経歴と職業経歴との間の対立を調整することであるととらえ、特に近年においては、従来の調整パターン(結婚後は婚家の家業に従事する、あるいは結婚退職をするなど)の見直しが迫られているとしている。本稿の目的は、ライフコース・アプローチを用いて、女性における家族経歴と職業経歴の調整のしかたが、40歳コーホートと50~60歳コーホート(1995年SSM調査の調査時点)でどのように変化したのかを明らかにすることである。

そこでまず始めに、森岡(1988)、Elder(1977=1986)、Hareven(1982=1990)などに依拠しつつ、分析の枠組みを述べよう。ライフコースとは、Elder(1977=1986)の定義にしたがえば、年齢別に分化した役割と出来事を経つつ個人がたどる道である。年齢と多かれ少なかれ結びついた出来事、たとえば学校教育の開始と終了、初就職、結婚、第1子の誕生等々は、それが起きた時点で、ある役割が開始もしくは終了したことを関係者に告げる。人はこれらの出来事を境にして、先行役割の離脱と新しい役割の獲得という役割移行を経験する。次々と起こる役割移行は役割継起をもたらし、1つの経歴を紡ぎだしてゆく(石原、1987)。

ところでわれわれ現代人は、1つの経歴というよりは複数の経歴を持っている。それは、近代化とともに、バーガーらが「生活世界の複数化」と呼ぶような現象が起きたからである(Berger et al.,1973=1977)。すなわち公領域と私領域の分化が起こり、公領域はさらに職業領域、クラブなどの社会活動領域などに細分化されていった。したがって経歴の概念は、細分化された生活領域ごとに、家族経歴、職業経歴、社会活動経歴などと区分けすることができる。すなわち経歴はライフコースの下位概念として位置づけることができ、ライフコースは「重要な生活諸領域における諸経歴の、年齢によって特色ある組み合わせ」として再構成することができる。

個人がこのような相互に独立した複数の経歴を同時に持つようになったということは、役割という観点に置き換えてみるならば、個人が、相互にある程度独立した複数の役割を同時に持つようになったということである。そしてこのような状態においては、しばしば役割葛藤が起こりうる。これを再び経歴という観点から見れば、経歴葛藤とも呼ぶべきもの——すなわち個人の持つ諸経歴間の、時間、エネルギー、金銭などの資源配分のプライオリティをめぐる対立——が起きる可能性が生じる。しかもこの経歴葛藤は、家族の存在により、他の家族員の諸経歴をも巻き込んだ、より複雑なものになる。というのは、近代の家族はその成員が相互に生活保障の責任を担い合う単位であるからである（Litwak,1965）（Allan,1985）（山田,1994）。家族成員の生活保障は無償の家事労働と、職業労働から得られる金銭的収入によって主に行われるので（大和,1995）、ある人の家族経歴と職業経歴は他の家族成員の生活保障の必要に応えるために、様々な調整を余儀なくされる。

家族経歴と職業経歴の調整という現象を捉えるために、Hareven(1982=1990)のタイミング(timing)と同調性(synchronization)という概念を援用しよう。タイミングとは先に例をあげたような人生上の出来事（初就職、結婚、第1子の誕生等々）が起こる時機や順序のことである。同調性とは、それら人生上の出来事のタイミングが何によって調整されるのかに関する概念である。例をあげよう。Modell,J., Furstenberg,F. and Hershberg,T.(1976)は、19世紀後半の米国フィラデルフィアにおける青年期への移行を研究した。彼らによると、労働力への参入、結婚、独立世帯の形成といった基本的な移行の歩みは遅く、特定のコーホートがこれらの出来事を完了するには長い時間がかかり、1つの確立された継起的順序をたどるものではなかった。それに対して現代社会においては、青年期への人生移行のパターンがかつてよりも秩序だって短期間に圧縮されている。モデルらはこのような変化の原因を、かつての社会では人生上の出来事のタイミングが個々の家族の事情によって調整されていた（いわば家族の必要による時間割に同調した）のに対し、現代社会では社会的に共有された年齢規範が優越するようになった（年齢規範に同調している）ためだと論じている。

高度成長以後の日本において、男性は職業上の時間割（就職、昇進、昇給など）にあわせて、家族生活上の出来事（結婚、子どもを持つ、持ち家取得など）のタイミングを調整してきた。そして木本（1995）が明らかにしたように、日本の企業社会、中でもそれをリードしてきた大企業は、そのような形での調整をサポートする制度をつくりだしてきた。一方女性は、家族、とりわけ生殖家族の必要にあわせて、就業あるいは離職のタイミングを調整してきた。

ただし、その調整のしかたはコーホートによって異なっている。雇用職業総合研究所（1988）の報告によると、出生コーホート別に見て、1913-1917年コーホート（同報告の調査時点では65-69歳、1995年SSM調査時点の年齢に換算すると77-81歳。以下、年齢は1995年SSM調査時点に換算した年齢を示す）においては、年齢ごとの就業率曲

線（自営業や家族従業者など非雇用者を含む）は台形をしており、また雇用者のみの雇用就業率曲線は 20 歳頃にピークがあり 25 歳頃には底につき、それ以後はあまり変化がないという形を描いている。日本における女性就業の特徴といわれる M 字型の曲線は現れていない。すなわちこのコーホートにおいては、雇用者は結婚前後に退職をし、それ以降就業する場合は主に家族従業者として働いたため、出産・育児期も働き続けたということを示している。家族経歴と職業経歴との調整という観点から見ると、結婚・出産という家族経歴にあわせて雇用者としての職業経歴は中断するが、それ以降は家族従業者として家族経歴と職業経歴を未分化な状態で共に維持してきたといえる。

ところがこれより 5 歳若い 1918-1922 コーホート(72-76 歳)では、就業曲線においても雇用就業曲線においても M 字型カーブが現れはじめています。すなわち結婚・出産にあわせて退職し、育児期は無職の状態ですごし、末子が 6 歳頃になると再び雇用者として働きはじめるというやりかたで、家族経歴と職業経歴を調整するパターンが、新たに出現しはじめたのである。その後、1938-1942 コーホート(52-56 歳)まで、景気の変動などにもなつて多少の紆余曲折は見られるが、大きな趨勢としてはこのパターンは強まり、典型的な M 字型カーブを描くようになっていく。これより若いコーホート（1943-1947 コーホート、47-51 歳）については、調査時点が末子 6 歳時（このコーホートの平均という意味で）にあたり、これより後のデータがないので確かなことはいえない。しかし雇用労働を結婚・出産を機に一度中断して、その後再参入するという傾向はさらに促進されるのではないかと、同報告書においては予想されている。

さらに、この M 字型を描く調整のしかたの中にも、コーホートによって違いが現れている。まず 1 つめとして、労働市場から退出する時期が、高年のコーホートでは結婚前に集中していたのに対し、若いコーホートになるほど第 1 子出産の頃に退職するものや、さらには末子出産の頃に退職するものが増えている。2 つめとしては、労働市場への再参入の時期に早期化の傾向が見られるということである。高年のコーホートでは、末子 6 歳の頃からはじめて再参入が始まっていたが、1928-1932 コーホート(62-66 歳)では末子 6 歳より前から参入する傾向がはっきりと見られはじめ、その後も基本的な趨勢としてはこの傾向は続いている。3 つめとして、コーホートが若くなるほど、出産・育児期にも雇用者として労働市場にとどまる人が多くなっている。

以上のことから、M 字型を描く家族-職業経歴の調整パターンの中にも、さらに細かなバリエーションが生まれてきていることが推測できる。上野（1994）は、「女性はライフステージ上、二度の意思決定を経験する。第一は、（結婚あるいは出産の時期に）離職するか職場にとどまるか、という選択、第二は（子どもの手が離れた時）職場復帰するか家庭にとどまるか、という選択である」（括弧内は引用者による注釈）と述べている。しかしそれだけではなく、雇用職業総合研究所のデータによると、「やめるとするといつやめるのか」「再就職するとするといつするのか」という選択をもしなければならなくなっているのである。

本稿では、上野のいう女性の第 2 の選択、すなわち労働市場への再参入に注目する。そして 1995 年 SSM 調査のデータを用いて、家族経歴と職業経歴の調整のしかたがコーホートによってどのように変わったのかについて探索的データ分析を行い、仮説を提出する。特に、雇用職業総合研究所（1988）の調査で再参入以後のデータがそろっていた 50 歳～60 歳台の人（1995 年時点）と、データがそろっていなかった 40 歳台の人（同じく 1995 年時点）との差に注目したい。50 歳～60 歳台の人については、それより前のコーホートに比べて、再参入する人の割合の増加と、再参入のタイミングの早期化と多様化が観察された。この 2 つの傾向が 40 歳台の人においても続いたのだろうか、あるいは別の傾向が現れたのだろうか。さらに、30 歳台の人（1995 年時点）においては、次節で見るように、1995 年 SSM 調査の時点で末子が 6 歳に達していない人が 4 割おり、再参入のパターンを見るためには十分なデータとは言い難い。しかし、今後の予想の材料として言及したい。

本稿の分析は、以下のような順序で行う。次の第 2 節では分析対象となるコーホートのプロフィールを、1) 家族ライフイベントの経験率と、2) 各ライフイベントの時点における就業状況、の 2 点から概観する。第 3 節では、「再参入した／していない」に焦点を当て、コーホートごとの比較を行う。第 4 節では再参入「した」人に焦点を当て、そのタイミングや、どのような従業上の地位に再参入したのか（フルタイムかパートタイムかなど）などについて、コーホートごとの比較を行う。第 5 節では以上の分析結果を要約する。第 6 節では分析をもとに、家族経歴と職業経歴の調整のしかたがコーホートでどのように変わったのかについて議論し、仮説を提出する。

## 2. コーホートのプロフィール

### 1) 家族ライフイベントの経験率

本稿ではコーホートを次のように分けた。

1966-1975 年生まれ（調査時年齢 20-29 歳=20 歳コーホート）
1956-1965 年生まれ（調査時年齢 30-39 歳=30 歳コーホート）
1946-1955 年生まれ（調査時年齢 40-49 歳=40 歳コーホート）
1936-1945 年生まれ（調査時年齢 50-59 歳=50 歳コーホート）
1926-1935 年生まれ（調査時年齢 60-69 歳=60 歳コーホート）

ただし第 3 節の 2) と第 4 節の 3) の分析では、労働市場に再参入した人の数を十分確保する必要から 50 歳コーホートと 60 歳コーホートを統合し、50-60 歳コーホートとした。また 20 歳コーホートは後に見るように半数以上が未婚であるため、分析から除外した。

各コーホートのプロフィールを概観する作業の 1 つめとして、労働市場からの退出と

再参入に強い影響を与える家族ライフイベントを、どの程度の人が経験しているのかについて、コーホートごとに見ておこう。取り上げるイベントは、結婚、第1子出産、末子3歳、末子6歳（幼稚園入園）、末子13歳（中学校入学）、末子16歳（高校入学あるいは義務教育終了）の6つである。

### ①結婚（表1）

20歳コーホートでは55%が未婚である。30歳コーホートでは未婚の人は8%に下がり、これより高年のコーホートでは95%以上が既婚（死別・離別を含む）である。また死別については、50歳コーホートで経験者が5%を越え、60歳コーホートでは2割近くが経験している。

次に、現在結婚している人をベースにして、子どもに関するイベントの経験についてみていこう。ただし20歳コーホートについては既婚者が半数に達していないので以下の分析からは除くことにする。

	未婚	結婚中	死別	離別	計
20歳コーホート	55.0	44.0	0.5	0.5	191
30歳コーホート	8.0	90.2	0.7	1.1	276
40歳コーホート	4.4	89.4	1.9	4.4	367
50歳コーホート	2.6	87.9	5.6	3.9	305
60歳コーホート	3.4	76.5	18.2	1.9	264
合計	11.4	80.6	5.3	2.6	1403

### ②第1子出産（表2。以下、末子16歳まで、同表を参照）

第1子の出産は、30歳コーホートより年長のいずれのコーホートにおいても、経験した人が9割を越えている。

### ③末子3歳

末子(一人っ子的場合はその子)が3歳に達している人は30歳コーホートでは約7割であるが、それより高年のコーホートではほぼすべての人において末子が3歳に達している。

### ④末子6歳

末子が6歳に達している人の割合を見ると、30歳コーホートでは4割にすぎず、残りの6割は6歳未満の子どもがいる。40歳以上のコーホートについては、ほぼすべての人において末子が6歳に達している。

### ⑤末子13歳

末子が13歳に達している人は30歳コーホートでは5%でありほとんどいない。40歳

	結婚している女性		子供がある女性				N
	子供あり	N	末子3歳	末子6歳	末子13歳	末子16歳	
30歳コーホート	92.0	249	68.1	40.6	5.2	0.9	229
40歳コーホート	94.2	326	98.0	95.1	71.3	48.2	307
50歳コーホート	96.2	266	100.0	100.0	99.2	96.1	256
60歳コーホート	95.5	202	100.0	100.0	100.0	100.0	190
合計	94.4	1043	92.0	84.6	68.7	59.7	982

コーホートでも達している人は7割であり、残りの3割は13歳未満の子どもがいる。50歳コーホートではじめて、ほぼすべての人において末子が13歳以上という状態が現れる。

#### ⑥末子16歳

最後に、末子が16歳に達している人については、30歳コーホートではそのような人はほとんどいず、40歳コーホートでも約半数しかいない。50歳コーホートになってはじめて、ほぼすべての人において、末子が16歳以上という状態が現れる。

以上から、50歳コーホートと60歳コーホートでは、中学生以下の子どもを持つ人はほとんどいない。40歳コーホートでは、末子が中学生以上という人が7割で多数派であり、残りの3割はまだ小学生の子どもを持っている。30歳コーホートについては、末子が6歳以上という人は4割であり、残りの6割は6歳未満の子どもがおり、また3歳未満の子どもがいる人も3割いる。

子どもの手が離れる時期のめやすを6歳とすると、30歳コーホートについては6割の人がまだ子どもの手が離れず、労働市場への再参入が難しい時期にいることになる。したがって30歳コーホートについては再参入がまだ本格的には始まっていないと考えることができる。したがって以下の分析では、主として40歳以上のコーホートに注目する。ただし30歳コーホートについても、目立った特徴と考えられる点には言及し、このコーホートの再参入のパターンを予測するための材料として、取り上げたい。

### 2) 家族ライフイベントに就業状況の変化（コーホートによる比較）

各コーホートのプロフィールを概観する作業の2つめとして、初就職、結婚、第1子出産、末子出産、末子3歳、末子6歳、末子13歳、末子16歳といった家族ライフイベントに伴って、労働市場からの退出と再参入がどのように起こっているのであろうか。その大まかな見取り図を知るために、就業状況を次のように分類し、各ライフイベントの時点におけるその分布をコーホートごとに見ていこう。

有職	フルタイム・パートタイム 家族従業者・自営業
無職	中途退職（学卒～結婚前には何らかの職に就いたことがあるが、当該ライフイベントの時点では無職） 中途就職（学卒後～当該イベントまでは職に就いたことはないが、その後、初めて職に就いた） 一貫無職（調査時点まで一度も職に就いたことがない）

#### ①初就職時（表3-①）

結婚前に始めてついた仕事については、30～40歳コーホートでは8割以上がフルタ

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ①結婚前の初就職時 (%)

	有職		無職（結婚前には就職しなかった人）					合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホト	82.3	8.8	4.8	4.0	-	1.2	2.8	249
40歳コ-ホト	84.7	4.3	4.9	6.1	-	3.7	2.4	327
50歳コ-ホト	64.8	6.0	15.0	14.2	-	8.2	6.0	237
60歳コ-ホト	48.5	4.0	22.3	25.2	-	13.4	11.9	202
合計	72.1	5.7	10.8	11.4	-	6.1	5.3	1045

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ②結婚時 (%)

	有職		無職（結婚前には就職しなかった人）					合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホト	39.1	7.8	9.9	43.2	39.1	1.2	2.9	243
40歳コ-ホト	33.4	4.5	13.4	48.7	42.7	3.5	2.5	314
50歳コ-ホト	25.9	5.1	13.0	51.0	36.1	8.6	6.3	255
60歳コ-ホト	16.9	0.5	27.2	55.4	29.2	13.8	12.3	195
合計	29.7	4.7	16.4	49.3	37.5	6.3	5.5	1007

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ③第1子出産時 (%)

	有職		無職（結婚前には就職しなかった人）					合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホト	25.9	5.4	11.6	57.1	53.1	0.9	3.1	224
40歳コ-ホト	21.1	3.2	14.0	61.8	56.1	2.8	2.8	285
50歳コ-ホト	19.3	4.2	21.0	55.5	40.3	8.4	6.7	238
60歳コ-ホト	13.8	0.0	26.0	60.2	33.7	13.3	13.3	181
合計	20.4	3.3	17.6	58.7	47.0	5.8	5.9	928

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ④末子出産時 (%)

	有職		無職（結婚前には就職しなかった人）					合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホト	19.7	4.9	12.1	63.2	59.6	0.4	3.1	223
40歳コ-ホト	18.0	6.0	14.4	61.6	56.7	2.1	2.8	284
50歳コ-ホト	16.2	5.1	22.2	56.4	42.7	6.8	6.8	234
60歳コ-ホト	10.6	0.6	27.9	60.9	38.0	9.5	13.4	179
合計	16.5	4.5	18.5	60.5	50.2	4.3	6.0	920

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ⑤末子3歳時 (%)

	有職		無職（結婚前には就職しなかった人）					合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホト	22.2	11.7	14.9	51.3	46.1	0.6	4.5	154
40歳コ-ホト	19.9	8.9	14.9	56.2	52.0	1.4	2.8	281
50歳コ-ホト	16.2	6.4	23.0	54.5	41.3	6.4	6.8	235
60歳コ-ホト	11.6	0.6	29.8	58.0	36.5	8.3	13.3	181
合計	17.5	6.9	20.3	55.2	44.7	4.1	6.5	851

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ⑥末子6歳時 (%)

	有職			無職(結婚前には就職しなかった人)				合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホ-ト	17.9	20.0	13.7	48.4	40.0	1.1	7.4	95
40歳コ-ホ-ト	19.7	18.6	15.4	46.2	42.7	0.7	2.9	279
50歳コ-ホ-ト	17.9	8.5	23.1	50.4	38.0	5.6	6.8	234
60歳コ-ホ-ト	13.7	2.2	30.1	54.1	32.8	8.2	13.1	183
合計	17.6	12.0	20.9	49.6	38.7	3.9	7.0	791

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ⑦末子13歳時 (%)

	有職			無職(結婚前には就職しなかった人)				合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホ-ト	16.7	27.8	11.1	44.4	5.6	0.0	38.9	18
40歳コ-ホ-ト	28.2	29.6	14.1	28.2	24.4	0.0	3.8	213
50歳コ-ホ-ト	18.8	17.9	22.5	40.8	32.5	1.7	6.7	240
60歳コ-ホ-ト	15.8	6.0	30.1	48.1	32.2	2.7	13.1	186
合計	20.9	18.7	21.6	38.8	29.1	1.4	8.4	654

表3 ライフイベント経験時の就業状況 ⑧末子16歳時 (%)

	有職			無職(結婚前には就職しなかった人)				合計
	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業	無職計	中途退職	中途就職	一貫無職	
30歳コ-ホ-ト	11.1	0.0	11.1	77.8	0.0	0.0	77.8	9
40歳コ-ホ-ト	30.8	28.1	15.1	26.0	20.5	0.0	5.5	146
50歳コ-ホ-ト	18.9	21.5	20.6	39.1	30.9	1.3	6.9	233
60歳コ-ホ-ト	15.1	7.6	28.6	48.6	34.1	1.6	13.0	185
合計	20.6	18.3	21.6	39.4	28.8	1.0	9.6	573

イムに就いている。50歳コ-ホ-トではフルタイムの比率が下がり、代わって家族従業者・自営業、無職(中途就職、一貫無職)の割合が増える。60歳以上ではこの傾向がさらに強まっている。したがって結婚前の初就職に関しては、就職しなかった人が50歳コ-ホ-トで1割以上、60歳コ-ホ-トでは2割以上いる。

## ②結婚時(表3-②)

初就職から結婚にかけて、労働市場からの退出が始まる。煩雑になるためデータは掲載していないが、結婚2年前の時点での就業状況を見ると、初就職時と比べて、4つのコ-ホ-トすべてで、フルタイムの人は約10ポイント減少し、それに代わって中途退職というカテゴリーが現れる。パートタイムや家族従業者・自営の割合は、ほとんど変化がない。

結婚時の就業状況は表3-②に示した。初就職時と比べると、フルタイムが4~2割弱にまで減り(フルタイムが最も多く残っている30歳コ-ホ-トで4割、最も少ない60歳コ-ホ-トで2割以下)、それに代わって中途退職が30~50歳コ-ホ-トで4割前後、60歳コ-ホ-トで3割まで増えている。3つの無職カテゴリー(中途退職、中途就職、一貫無職)をあわせると、この時点で無職の人は、4.5~5.5割にまで増える。若年より高年のコ-ホ-トの方が無職の割合は多い。パートタイムや家族従業者・自営の割合は、あまり変化がない。



### ③第1子出産時（表3-③）

第1子出産時においては、結婚時と比べると、いずれのコーホートにおいてもフルタイムの割合はさらに減少し、特に若いコーホートほど減少率は大きい。若いコーホートで出産退職というパターンが増加していることを示している。フルタイムの減少に対応して、中途退職の割合はさらに増える。3つの無職カテゴリー（中途退職、中途就職、一貫無職）をあわせると、無職の人の割合は6割前後で、コーホート間に大きな差はない。パートタイムや家族従業者・自営の割合は、ひきつづき続きあまり変化がない。

### ④末子出産時（表3-④）

フルタイムが減少し、無職が増加するという傾向がさらに続くが、他のコーホートに比べて30歳コーホートにおいてその傾向がより強く現れている。若いコーホートで、第1子出産時には退職せず第2子出産以降に退職するというパターンが増加していることを示している。無職についてみると、3つの無職カテゴリー（中途退職、中途就職、一貫無職）をあわせると、その割合は6割前後で、コーホート間にあまり大きな差はない。パートタイムや家族従業者・自営の割合は、ひきつづき続きあまり変化がない。

### ⑤末子3歳時（表3-⑤）

30歳コーホートで、今までの傾向が逆転し、先行するイベント時に比べ無職が減りパートタイムが増加する傾向が初めて現れる。フルタイムや家族従業者・自営の割合は、すべてのコーホートにおいてあまり変化がない。

### ⑥末子6歳時（表3-⑥）

40歳コーホートでも、先行するイベント時に比べ無職が減りパートタイムが増加する傾向が現れる。フルタイムや家族従業者・自営の割合は、すべてのコーホートにおいてひきつづき続きあまり変化がない。

### ⑦末子13歳時（表3-⑦）

50歳コーホートと60歳コーホートでも、先行するイベント時に比べ無職が減りパートタイムが増加する傾向が現れる。フルタイムに関しては、40歳コーホートで末子6歳時に比べ約10ポイント増加し、3割近い人がフルタイムに就いている。これは他のコーホートに比べても多い。家族従業者・自営についてはあまり変化がない。

### ⑧末子16歳時（表3-⑧）

30歳コーホートについては、このイベントを経験した人は9人にすぎないので、確かなことは言えない。40歳コーホート以上については、末子13歳時の分布割合と、ほとんど変化がない。

以上から、労働市場からの退出と再参入に関して次のような見取り図を描くことができる。まず退出に関しては、結婚退職に加えて、第1子出産退職あるいは第2子以降出産退職というパターンが若いコーホートで見られ、退出時期の遅れが起こっている。

次に、再参入に関しては、再参入が目立って多くなるのは、50歳～60歳コーホートに

においては末子 13 歳時、40 歳コーホートでは末子 6 歳時、30 歳コーホートでは末子 3 歳時である。このことから、再参入の早期化が起きているといえる。(ただし 30 歳コーホートについては、末子が 6 歳に達している人は 4 割しかいないため、これは現時点での暫定的な観察結果にすぎない。)

### 3. 再参入した／していないに関するコーホート比較

本節と次節では、「末子出産後の再参入」に注目して、そのコーホートごとの特徴を見ていくことにしよう。

まず本節では、「再参入した／していない」の違いに焦点を当てる。本節で分析の対象とするのは、「末子出産時に無職だった人」であり、このような人の人数等は以下の通りである。

30 歳コーホート	: 141 人 (同コーホートで子どもがいる人のうちの 63.2%)
40 歳コーホート	: 175 人 ( " 61.6%)
50 歳コーホート	: 132 人 ( " 56.4%)
60 歳コーホート	: 109 人 ( " 60.9%)

#### 1) 再参入した人の割合 (表 4)

これらの人のうち、その後労働市場に再参入した人がどのくらいいるかを示したのが表 4 である。60 歳コーホート、50 歳コーホート、40 歳コーホートとコーホートが若くなるほど再参入する人が増えており、50 歳コーホートでは半数、40 歳コーホートでは 6 割が再参入している。ただし 30 歳コーホートについては、子どもの養育期であるため再参入した人はまだ少ない。

表 4 末子出産後、労働市場に再参入した人と  
していない人 (コーホート別  $p < 0.1$ )

	再参入し		合計
	再参入した	していない	
30歳コーホート	27.0	73.0	141
40歳コーホート	61.7	38.3	175
50歳コーホート	53.8	46.2	132
60歳コーホート	38.5	61.5	109
合計	46.5	53.5	557

#### 2) 再参入した／していないと社会階層

ここでは社会階層と、再参入した／していないの関係について見ていこう。このテーマについては多くの研究がされているが、社会階層論あるいは社会階級論の分野での大規模調査データを用いた研究として、岡本ほか(1990)と牛島(1995)をとり上げる。これらとは

もに、女性の中年期（40歳前後）の就業状況は、夫の階層的地位や家族の経済状況に影響されることを報告している。まず、岡本ほかによると、中途退職型（結婚・出産の頃に無職になり40歳の時点で無職である）の人は、夫が専門管理職の人に多い。また牛島によると、35—54歳の女性の就業状況については、夫が高学歴・高収入であるほど無職である確率が高い。また住宅などのローンの有無も影響があり、ローンがないほど無職である確率が高い。すなわち先行研究は、夫の階層的地位が高いほど、そしてそれと相関が高い家族の経済状況が豊かであるほど、再参入しない傾向にあることを報告している。妻本人の階層的地位については両報告はくいちがっており、岡本ほか(1990)では高学歴の妻で中途退職型が多いという結果であるのに対して、牛島(1995)では妻の学歴の影響はまったく見られない。

1995年SSM調査のデータでも、夫の地位や家族の経済状況に関しては上に述べたのと同様の傾向が見られるのであろうか。また妻の地位についてはどうであろうか。そしてそこにはコーホートによる差は見られるのであろうか。

そこで本稿では、妻本人と夫の学歴、夫の収入によって再参入した／していないに違いがあるのかどうかを、コーホートごとに分析した。コーホート、妻と夫の学歴、夫の年収についての変数の詳細は以下のとおりである。コーホートについては、60歳コーホートで再参入したケースが少ないので、50歳コーホートと60歳コーホートを合併して、50—60歳コーホートとした。30歳コーホートについてはケース数が少ないので、あくまで参考として報告する。

コーホート	30歳コーホート : 1956—1965年生まれ（調査時年齢30—39歳） 40歳コーホート : 1946—1955年生まれ（調査時年齢40—49歳） 50—60歳コーホート : 1926—1945年生まれ（調査時年齢50—69歳）
妻・夫の学歴 (教育年数)	中卒相当 : 旧制尋常小学校(6)、旧制高等小学校(8)、新制中学校(9) 高卒相当 : 旧制中学校・高等女学校(11)、実業学校(11)、師範学校(11)、 新制高校(12) 大卒相当 : 旧制高校・専門学校・高等師範学校(14)、旧制大学(17)、 新制短大・高専(14)、新制大学(16)、新制大学院(18)
夫の年収	450万円未満 450～750万円未満 750万円以上

#### ①妻本人の学歴（表5）

まず妻本人の学歴についてみると、50—60歳コーホートでは中卒相当者と大卒相当者で参入が多く、高卒相当者が少ない。このコーホートは高等教育の大衆化を経験していないため、女子の高卒相当者は比較的高い学歴の持ち主であった。したがって一般的傾向と

表5 妻本人の学歴×再参入した/していない(コーホート別)

コーホート	妻本人の学歴	再参入し		合計
		再参入した	していない	
30歳コーホート p < .05	中・高卒相当	32.3	67.7	93
	大卒相当	16.7	83.3	48
	合計	27.0	73.0	141
40歳コーホート p < .05	中卒相当	65.4	34.6	26
	高卒相当	66.1	33.9	121
	大卒相当	39.3	60.7	28
	合計	61.7	38.3	175
50-60歳 コーホート p < .01	中卒相当	55.6	44.4	99
	高卒相当	37.3	62.7	126
	大卒相当	68.8	31.3	16
	合計	46.9	53.1	241

単位%

しては、学歴が高い方が参入しない傾向にあるといえる。しかし大卒相当者(このコーホートにおいては例外的に高学歴の層といえる)において参入した人が多く、この人々については、前述の一般的傾向(学歴が高い方が参入しない)は当てはまらない。

一方、高等教育大衆化を経験したコーホートである40歳コーホート、30歳コーホートにおいては、大卒相当者には参入しない人が多く、中卒・高卒相当者に参入が多い。しかもこれらのコーホートでは、サンプルのうち中卒相当者が少ないことから、再参入した人のうち高卒相当者の占める割合が目立ち、40歳コーホートでは約75%、30歳コーホートでは約80%である(表5の列%参照)。すなわち学歴の低い層でより多く参入する傾向が見られる。

以上から妻本人の学歴については、学歴が低い層でより多く参入する傾向が見られる。特に40歳コーホート、30歳コーホートでは参入した人の7~8割は高卒相当者に集中している。しかし、50-60歳コーホートの高等教育を終了した女性はこの例外であり、他の学歴の人より多く参入している。

## ②夫の学歴(表6、表7)

次に夫の学歴についてみると、50-60歳コーホートでは、妻本人の学歴と同様に、夫

表6 夫の学歴×再参入した/していない(コーホート別)

コーホート	妻本人の学歴	再参入し		合計
		再参入した	していない	
30歳コーホート p < .01	中卒相当	75.0	25.0	8
	高卒相当	37.5	62.5	64
	大卒相当	11.6	88.4	69
	合計	27.0	73.0	141
40歳コーホート	中卒相当	77.8	22.2	18
	高卒相当	64.1	35.9	103
	大卒相当	51.9	48.1	52
	合計	61.8	38.2	173
50-60歳 コーホート p < .01	中卒相当	57.7	42.5	80
	高卒相当	39.8	60.2	103
	大卒相当	43.4	56.6	53
	合計	46.6	53.4	236

単位%

表7 再参入した/していないによる夫の教育年数の違い (40歳コホート)

	N	平均	標準偏差	t 値	有意水準
再参入した	107	12.60	2.22	-2.037	p<.05
していない	66	13.30	2.19		

が中卒相当あるいは大卒相当の女性で参入が多く、高卒相当で少ない。女性について述べたのと同様の理由で、一般的傾向としては、夫の学歴が高い方がその妻は参入しない傾向にあるといえるが、夫が大卒相当の妻は例外である。

40 歳コホートについては、クロス表では有意な差はない。しかし教育年数について T 検定を行うと、参入した人の方がしなかった人より、夫の教育年数は短い。30 歳コホートについては、夫の学歴が高くなるほど参入した人は少ない(教育年数の T 検定においても同様の傾向が見られたが、データは省略する)。

以上から、夫の学歴についても妻の学歴と同様の傾向が見られる。つまり、夫の学歴が低い層で妻がより多く参入するが、50-60 歳コホートの大卒相当の学歴を持つ夫の妻は例外であり、この人たちは他より多く参入している。

### ③夫の収入 (表8)

最後に夫の収入について見ていこう。ただし夫の収入については、再参入時の収入のデータはないので、調査時の収入を代わりに用いた。また夫が 60 歳以上の場合は退職のため収入が低くなっている可能性があるため、50-60 歳コホートにおいては夫が 60 歳未満の人のみを分析対象とした。表8にあるように、いずれのコホートにおいても、再参入した人の方がしなかった人より夫の収入は少ない。

表8 再参入した/していないによる夫の年収の違い

		N	平均	標準偏差	t 値	有意水準
30歳コホート	再参入した	34	482.35	197.67	-1.973	p<.10
	していない	91	561.54	200.43		
40歳コホート	再参入した	94	661.70	313.53	-2.510	p<.05
	していない	55	796.36	320.28		
50-60歳コホート (注)	再参入した	41	604.88	334.63	-2.461	p<.05
	していない	24	858.33	495.12		

(注)ただし夫が60歳未満の人

以上の分析から、40 歳コホートにおいては、再参入した/していないは夫の階層的地位や家族の経済状況と関係が深く、階層的地位が低く経済的に豊かでない方がより再参入する傾向にあるといえる。妻の地位についても同様の傾向が見られた (ただしこれは夫の学歴との擬似相関の可能性があるが、ケース数が少ないので、確かめることはできなかった)。また 30 歳コホートについても、現時点では同様の傾向が見られる。一方 50-60 歳コホートにおいては、このコホートの大部分を占める中卒~高卒相当の女性については、40 歳コホートと同様の傾向が見られる。しかし、大卒相当という当時としては特別に学歴が高い女性においては、他の学歴の人より多く再参入する傾向が見られる。

すなわち、50-60 歳コホートから 40 歳コホートへの変化とは、前者においては、

夫の地位や経済力に加えて、妻の特別に高い教育達成が再参入を促す傾向が見られたのに対し、後者では夫の地位と経済力にもっぱら規定されるようになっていったということである。

#### 4. 再参入のしかたについてのコーホート比較

本節では、再参入「した」人に焦点を当て、再参入時の従業上の地位や、そのタイミングについて、コーホートごとにみていくことにする。

##### 1) 従業上の地位 (表9-①、表9-②)

まず、再参入時の従業上の地位についてみておこう。表9によると、コーホートが若くなるにつれフルタイムとして再参入する人が減り、変わってパートタイムが増えている。また家族従業者・自営業として再参入した人については、60歳コーホートにおいては約

表9-① 再参入時の従業上の地位 (再参入した人全て  
コーホート別)  $p < .01$

	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業者	
			家族従業者	合計
30歳コーホート	21.1	65.8	13.2	38
40歳コーホート	23.1	69.4	7.4	108
50歳コーホート	27.1	60.0	12.9	70
60歳コーホート	38.1	35.7	26.2	42
合計	26.4	60.9	12.8	258

表9-② 再参入時の従業上の地位 (末子16歳以下で再参入した人  
コーホート別)  $p < .01$

	フルタイム	パートタイム	家族従業者 自営業者	
			家族従業者	合計
30歳コーホート	21.1	65.8	13.2	38
40歳コーホート	22.9	69.5	7.6	105
50歳コーホート	28.1	69.6	12.3	57
60歳コーホート	43.3	26.7	30.0	30
合計	26.5	60.9	12.6	230

4分の1を占めていたが、50歳コーホートではその約半分、40歳コーホートではさらに約半分の割合に減少している。この結果、60歳コーホートでは再参入時の従業上の地位は、フルタイム、パートタイム、家族従業者・自営と多様であったが、40歳コーホートにおいてはパートタイムに約7割が集中し、画一化しているといえる。(表9-②は、次項のタイミングについての分析において述べる理由から、末子16歳以下で再参入した人について、表9-①と同様の分析を行った結果である。表9-①とほぼ同じ結果を示している。)

##### 2) タイミング (表10-①、表10-②、図1)

次に再参入のタイミングとして、末子が何歳の時に再参入したのかを見てみよう。ただ

し再参入した人すべてについてこの比較を行うと、年長のコーホートでは高年になってから再参入した人も分析に含まれるのに対し、年少のコーホートでは若いうちに再参入した人しか分析に含まれないことになるので、コーホート間の比較は意味をなさない。そこで、末子が16歳以下で再参入した人に分析対象を限定するという方法を採用する。末子16歳時を選んだのは次のような理由からである。先に見たように、末子13歳時と16歳時で就業状況の分布にほとんど変化がなく(表3-⑦、表3-⑧)、またデータは掲載していないが末子19歳時においてもほとんど変化がない。したがって末子16歳時点で、再参入する人の大部分は再参入し終わると判断した。

表10-①、表10-②は末子16歳以下で再参入した人について、再参入時の末子の年齢がコーホートによって異なるか否かについて、分散分析と多重比較を行った結果である。これによると、30歳コーホートは他のコーホートより早く再参入しているが、40歳以上のコーホートについてはコーホート間にあまり差は見られない。また標準偏差については、40歳コーホート、50歳コーホート、60歳コーホートの間にはあまり大きな差は見られない。

次に、再参入のタイミングの分布パターンを図1で見てみよう。60歳コーホートでは、再参入した人が少ないこともあって、非常にでこぼこした線を描いているが、全体として見るとはっきりしたピークはなく、様々なタイミングで参入していることがわかる。50歳コーホートでは再参入した人が増えたこともあって、なだらかな線を描いている。そして全体としては、60歳コーホートの傾向を引継ぎ、はっきりしたピークがなくさみだれ式に様々なタイミングで参入しているといえる。それに対して40歳コーホートでは、末子5歳の頃にはっきりしたピークが現れており、末子が5歳頃になると再参入するというパターンが現れたといえる。最後に30歳コーホートについては、再参入した人が少ないので参考程度にあげておくと、2つのピーク——末子が1～2歳頃と7歳頃——という新しいパターンが現れている。

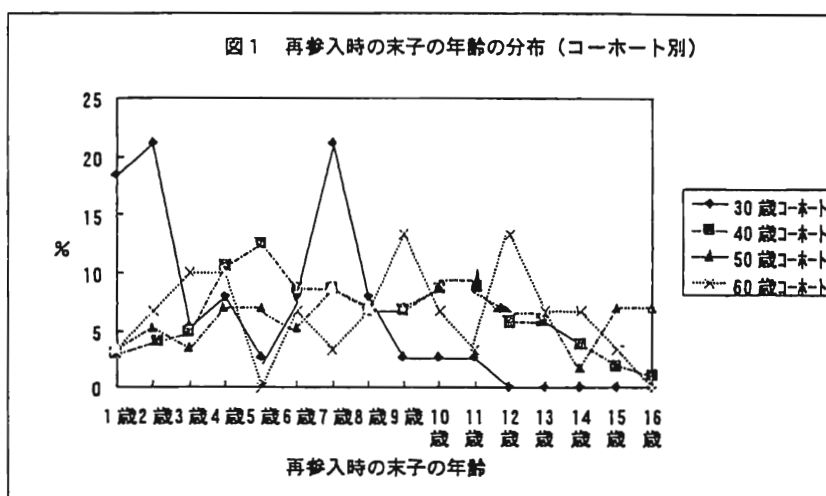
表10-1 再参入のタイミング  
(末子16歳以下で再参入した人・コーホート別)

	N	平均値	標準偏差	F値	有意水準
30歳コーホート	38	4.58	2.97	10.30	p<.01
40歳コーホート	105	7.73	3.70		
50歳コーホート	58	8.86	4.29		
60歳コーホート	30	8.17	4.19		
合計	231	7.55	4.04		

表10-2 多重比較

		平均値 の差 (I-	標準誤差 有意確率	
30歳代コホート	40歳コホート	-3.1544 *	.723	.000
	50歳コホート	-4.2831 *	.797	.000
	60歳コホート	-3.5877 *	.932	.000
40歳コホート	30歳コホート	3.1544 *	.723	.000
	50歳コホート	-1.1287	.625	.072
	60歳コホート	-0.4333	.790	.584
50歳コホート	30歳コホート	4.2831 *	.797	.000
	40歳コホート	1.1287	.625	.072
	60歳コホート	0.6954	.859	.419
60歳コホート	30歳コホート	3.5877 *	.932	.000
	40歳コホート	0.4333	.790	.584
	50歳コホート	0.4333	.790	.584

\*平均の差は5%で有意



### 3) タイミングの規定要因

最後に、再参入のタイミングと、本人や夫の階層的地位および再参入後の本人の従業上の地位との関係を見てみよう。

本人の従業上の地位をとり上げるのは次のような理由からである。女性の再就職に関しては年齢が主要なフィルターの役割を果たすことが知られている。フルタイムの正規従業員として職場に復帰できるか否かの選別に年齢は大きな影響を及ぼす。一方パートタイマーの場合は、年齢による選別はそれほど厳しくない。日本労働研究機構(1993)においても、再参入のタイミングは正社員と非正社員(あるいはパートタイマー)によって異なっており、正社員の方が中断期間は短く、再参入時の本人の年齢や末子の年齢は若くなる傾向が報告されている。したがって再参入後の従業上の地位は、タイミングの決定と強く関連していると考えられる。

以下では、妻本人および夫の学歴、夫の収入、再参入後の従業上の地位と再参入のタイ



ミング（末子が何歳の時に再参入したか）との関係を、コーホートごとに見ていこう。コーホート、夫の学歴、夫の収入の区分は「3節 2）再参入した／していないと社会階層」における区分を踏襲している。再参入後の従業上の地位については、表 9 と同じ区分を用いる。妻の学歴については、短大卒相当と 4 大卒相当を分けた。その理由は、再参入した／していないの分析では、短大卒相当と 4 大卒相当は同様の傾向を示したのに対し、以下の「した」人についての分析では、両者は異なる傾向を示すように見えるからである。なお 30 歳コーホートについては、あくまで参考としてデータを示す。

妻の学歴	中卒相当	: 旧制尋常・高等小学校、新制中学校
	高卒相当	: 旧制中学校・高等女学校、実業学校、師範学校、新制高校
	短大卒相当	: 新制短大・高専
	4 大卒相当	: 旧制高校・専門学校・高等師範学校、旧制大学、 新制大学、新制大学院

### ①妻本人の学歴（表 11）

表 11 妻本人の学歴による、再参入のタイミングの違い  
（末子 16 歳以下で再参入した人・コーホート別）

		N	平均値	標準偏差	F 値	有意水準
30 歳コーホート	中・高卒相当	30	4.73	3.04	1.224	n. s.
	短大卒相当	4	5.50	2.65		
	4 大卒相当	4	2.50	2.38		
	計	38	4.58	2.97		
40 歳コーホート	中卒相当	17	7.94	3.73	.084	n. s.
	高卒相当	78	7.64	3.78		
	短大卒相当	7	8.29	2.78		
	4 大卒相当	3	7.67	4.73		
計	105	7.73	3.70			
50-60 歳コーホート	中卒相当	45	8.40	4.30	.683	n. s.
	高卒相当	36	9.08	4.20		
	短大卒相当	2	10.50	0.71		
	4 大卒相当	5	6.60	4.93		
計	88	8.63	4.25			

### ②夫の学歴（表 12）

夫婦の学歴についてみてみると、いずれのコーホートについても有意な差は見られない。ただし細かく見ると、夫の学歴については、いずれのコーホートにおいても学歴によるタイミングの差はほとんどないのに対し、妻の学歴については、30 歳コーホートと 50-60 歳コーホートでは 4 大卒が相対的に早く再参入し、短大卒は遅いという傾向がうかがわれる。しかし、短大卒・4 大卒の参入者の実数が少ないために、統計的には有意ではない。

表12 夫の学歴による、再参入のタイミングの違い  
(末子16歳以下で再参入した人・コーホート別)

		N	平均値	標準偏差	F値	有意水準
30歳コーホート	中卒相当	6	4.83	3.71	.229	n. s.
	高卒相当	24	4.33	2.60		
	大卒相当	8	5.13	3.76		
	計	38	4.58	2.97		
40歳コーホート	中卒相当	14	6.21	3.17	2.014	n. s.
	高卒相当	64	7.73	3.87		
	大卒相当	26	8.65	3.39		
	計	104	7.76	3.71		
50-60歳コーホート	中卒相当	37	8.27	4.43	1.954	n. s.
	高卒相当	31	9.84	4.20		
	大卒相当	17	7.53	3.86		
	計	85	8.69	4.29		

③夫の収入 (表 13)

次に夫の収入について見ていこう。50-60歳コーホートにおいては、夫の収入が多い人ほど再参入のタイミングは遅く、少ない人ほどタイミングは早い傾向がうかがわれるが、ケース数が少ないため有意ではない。それに対し 40歳コーホートについては収入によるタイミングの差は見られない。30歳コーホートにおいては、再びタイミングの差が現れ、50-60歳コーホートと同様に、夫の収入が多い人ほど再参入のタイミングは遅く、少ない人ほどタイミングは早い。

表13 夫の収入による、再参入のタイミングの違い  
(末子16歳以下で再参入した人・コーホート別)

		N	平均値	標準偏差	F値	有意水準
30歳コーホート	0~450万未満	19	4.00	3.02	3.353	p<.05
	450~750万未満	10	5.00	2.54		
	750万以上	5	7.60	2.07		
	計	34	4.82	2.97		
40歳コーホート	0~450万未満	23	7.26	3.70	.985	n. s.
	450~750万未満	41	7.61	3.43		
	750万以上	27	8.62	4.02		
	計	91	7.82	3.68		
50-60歳コーホート	0~450万未満	12	7.42	4.34	1.037	n. s.
	450~750万未満	17	9.18	4.39		
	(注) 750万以上	5	10.40	3.65		
	計	34	8.74	4.29		

(注)ただし夫が60歳未満の人

### ③再参入後の従業上の地位（表 14）

最後に、再参入後の従業上の地位による違いについてみてみよう。50-60 歳コーホートについては、フルタイムへの再参入がもっとも早く、次に家族従業者・自営業が続き、パートタイムへの再参入がもっとも遅い。しかし 40 歳コーホートにおいてはこのような差は見られない。特にフルタイムとパートタイムの差はほとんどない。最後に 30 歳コーホートにおいては再び差が見られ、家族従業者・自営業への再参入が最も早く、フルタイムへの参入がそれに続き、パートタイムへの参入が最も遅い。家族経歴と職業経歴が未分化な家族従業者・自営業への再参入を除いて考えると、50-60 歳コーホートと 30 歳コーホートでは、フルタイムへの参入は早いタイミングで行われ、パートタイムへの参入はそれより遅れる傾向が見られるが、40 歳コーホートではそのような傾向は見られない。

表14 再参入後の従業上の地位による、再参入のタイミングの違い  
(末子16歳以下で再参入した人・コーホート別)

		N	平均値	標準偏差	F 値	有意水準
30歳コーホート	フルタイム	8	3.50	2.67	4.609	p<.05
	パートタイム	25	5.48	2.93		
	家族従業・自営	5	1.80	0.84		
	計	38	4.58	2.97		
40歳コーホート	フルタイム	24	8.04	3.72	1.440	n. s.
	パートタイム	73	7.86	3.72		
	家族従業・自営	8	5.62	3.11		
	計	105	7.73	3.70		
50-60歳コーホート	フルタイム	29	6.90	3.67	7.000	p<.01
	パートタイム	42	10.31	4.15		
	家族従業・自営	16	7.69	3.94		
	計	87	8.69	4.23		

以上から、50-60 歳コーホートについては、再参入後の地位がフルタイムかパートタイムかによって、すなわち妻本人がどのような労働条件の職を目指すかによって、再参入のタイミングが異なっている。（また、妻本人の学歴や夫の収入によってタイミングが異なる傾向がうかがえるのだが、有意ではない。）それに対して 40 歳コーホートにおいては、そのような個人の事情による違いは見られなくなり、末子の年齢という単一の基準によってタイミングが図られる傾向、すなわち画一化する傾向が見られた。さらに 30 歳コーホートについては、（調査時点で既に再参入している人についてのみ言えることであるが）再参入後の地位によってタイミングが異なるという 50-60 歳コーホートと同様の傾向が、再び現れている。また夫の収入によっても違いが見られる。

### 5. 分析結果の要約

末子出産時に無職だった人が労働市場へ再参入するそのしかたについて、ここまでの分析でわかったことをまとめよう。ただし、繰り返しになるが、30 歳コーホートについては、まだ出産を経験していない人や末子が小さい人が多いため、調査時点までに再参入した人についての限定的な結果であることを断っておく。

## 1) 再参入した／していないについて

- ①割合：コーホートが若くなるにしたがって、再参入する人の割合は増える。40 歳コーホートでは6割の人が再参入している。
- ②階層的地位との関係：一般的傾向として、妻本人と夫の学歴、夫の収入などの階層的地位が低い方が多く再参入している。そのため30歳コーホートと40歳コーホートでは、再参入した人の7～8割は高卒相当の人が占めている。しかし50-60歳コーホートにおいては、当時としては例外的に高学歴である高等教育を修了した女性において、他より多く再参入する傾向が見られる。

## 2) 再参入「した」人における再参入のしかたについて

- ①従業上の地位：60歳コーホートは多様な地位に再参入していたのに対し、若いコーホートほどパートタイマーに集中する傾向が強まり、40歳コーホートでは再参入した人のうち7割がパートタイマーである。
- ②タイミング：末子出産後何年で再参入したのかについて平均値および標準偏差を見ると、30歳コーホートは他のコーホートより早く再参入しばらつきも少ないが、40歳、50歳、60歳の3つのコーホートの間には、違いはあまり見られない。しかしタイミングの分布パターンを見ると、60歳コーホートと50歳コーホートでは、多くの人が集中して再参入するようなピークとなる時機はなく、どの時期においても同じような割合で再参入している。ところが40歳コーホートにおいては、末子5歳の頃に、多くの人が集中して再参入するピークが現れている。30歳コーホートについてはさらに別のパターンが見られ、末子が1～2歳時と7歳時の2つの時点においてピークが見られる。
- ③タイミングの規定要因：妻本人および夫の学歴、夫の収入、再参入後の職業上の地位について分析を行った。50-60歳コーホートにおいては、再参入後の地位によってタイミングの違いが見られ、フルタイムよりパートタイムの方が遅れる傾向がある。しかし40歳コーホートについてはどの要因による違いも見られず、再参入のタイミングが末子の年齢(5歳頃)に同調し、画一化する傾向にある。さらに30歳コーホートについては、夫の収入と再参入後の地位によるタイミングの違いが見られ、夫の収入が高いほど、またフルタイムよりパートタイムの方が再参入が遅れる傾向にある。

## 6. 議論

以上の分析結果をもとに、本節では、50-60歳コーホートと40歳コーホートでは、女性において家族経歴と職業経歴を調整するしかたがどのように変わったのかについて議論を行う。さらに、30歳コーホートについては、限られたデータからではあるが、今後の調整のあり方としてどのようなシナリオが可能かについて論じたい。

## 1) 多様化から画一化へ

まず、再参入した／していないについて取り上げよう。全体的な傾向としては、再参入は属する家族の必要に規定され、家族が経済的に豊かで階層的地位が高い場合(すなわち妻が働く必要がなく、専業主婦であることがステイタス・シンボルとなるような家族の場合)は、妻の労働市場再参入を抑制し、逆の場合は促進するといえる。しかし、50-60歳コーホートにおいては、非常に高い学歴を持つ妻と同じく高学歴の夫の家族で、女性の再参入が例外的に促進されている。これは、このような層において、家族の必要だけでなく、女性のキャリア追求の必要のために早めに再参入するという傾向が存在していた、ということであらわすのではないだろうか。しかしこのような例外も、40歳コーホートでは存在しなくなり、家族の必要が、再参入を規定する唯一の要素となっていたのである。

次に、再参入を「した」人の、そのしかたについて見てみよう。50-60歳コーホートにおいては、参入後フルタイムの仕事に就いた人は再参入が早くなっている。このことから、このコーホートにおいては、女性個人がどのようなキャリアを追求するかによって、再参入のしかたは規定されていたといえよう。ただし、いくら早い再参入といっても、末子が6歳に満たない時期での参入はまれであり、大多数は末子が6歳を越えてから後において、早い・遅いの違いが生じたのである。すなわちこのコーホートでは、子どもの養育期には仕事をしないという原則は、キャリアを追求するか否かに関わらず、大多数の女性において守られていた。

それに対して、40歳コーホートでは、女性がキャリアを追求するか否か(すなわちどのような従業上の地位に再参入するか)は、タイミングの違いを生じさせなくなり、それに代わって、末子の年齢(5歳頃)に再参入のタイミングが同調するという面が目立ってくる。また再参入した人の74%が高卒の人であり、参入後7割がパートタイマーとなっていることから、求職者の階層的背景においても再参入後の従業上の地位においても、画一化が進行している。以上から、50-60歳コーホートから40歳コーホートへの変化は、「多様性から画一化へ」ということができるだろう。

## 2) 家族と個人による調整から家族と産業による調整へ

このような変化が起きた要因としては、次のようなことが考えられる。50-60歳コーホートにおいては、先に見たように、家族の必要に加えて女性個人のキャリア追求の必要が再参入を規定していた。それに対して40歳コーホートでは、雇用する側の企業の時間割に同調する傾向が強くなったのではないか。すなわち、40歳コーホートが再参入する時期にあたる時代においては、雇用する側の企業において、主婦をパートタイマーとして使うという雇用システムが確立したのではないだろうか。そしてライフコースのどの時点で再参入(雇用)するか、というタイミングについて、夫の収入がそれほど多くない家族の経済的必要および子育ての必要が、主婦労働力を求める企業の要求と折り合ったのが、末子の手が離れる5歳前後という年齢だったのではないだろうか。したがってこのコーホ

ートでは、家族の必要と企業の必要の折り合いが、再参入のタイミングを規定したのである。以上から、50-60歳コーホートから40歳コーホートへの変化は、「家族と個人による調整から家族と産業による調整へ」ということができるだろう。

### 3) フロンティアから制度化へ

さらにこのような違いは、上記の2つのコーホートが経験した時代の違いから生じているのではないだろうか。すなわち、まず50-60歳コーホートは、主婦の労働市場再参入という社会現象がフロンティアであった時代の、その最後の局面を経験したコーホートである。したがって、再参入する人は前のコーホートより増加した。しかも、まだ試行錯誤的な要素が残されていたために、参入する人の階層的地位においてもタイミングにおいても、また再参入後の従業上の地位においても多様性が見られた。一方、40歳コーホートは、再参入がフロンティアではなく、ある社会階層に属する人の通常のライフコース上の出来事となり、制度化が進んだ時代を経験したコーホートであるといえる。したがって、再参入する人の割合はさらに増加し再参入がマジョリティとなった。同時に子どもが5歳頃になるとパートタイマーとして参入するという半ば制度化された参入のしかたが現れた。そしてこのような形で再参入したのは、おもに高卒相当の女性だったのである。以上のような、50-60歳コーホートから40歳コーホートへの主婦の労働市場再参入に関する経験の変化は、「フロンティアから制度化へ」ということができよう。

### 4) 30歳コーホートにおける再参入のシナリオ

それでは、次のコーホートである30歳台コーホートの再参入のあり方については、どのようなシナリオが可能だろうか。1995年SSM調査時点までのデータをもとに考えてみよう。第1に、再参入した／していないについては、40歳コーホートと同様、妻本人および夫の学歴が低いほど再参入する人が多い。この点からは、先に述べた、40歳コーホートでいわば「制度化」された再参入のあり方がそのまま踏襲されるというシナリオが成り立つ。

第2に、再参入「した」人のタイミングについては、家族の経済状況に加えて、個人のキャリア追求の必要によっても差が生じている。すなわち、参入後の地位がパートタイムよりフルタイムの方が早く参入している。また参入のタイミングには2つのピークが見られ、そのうちの1つは、末子1~2歳時である。つまり、前のコーホートまでは維持されていた「末子5歳頃までは参入しない」というパターンが、30歳台コーホートでは破られつつあるかもしれないのである。このことは、30歳コーホートでは幼児の養育より個人のキャリア追求を優先する層が、ある一定の割合を占めて現れるかもしれないということの意味する。これらの諸点からは、家族の必要と個人のキャリア追求によって再参入が調整されるというパターンが再び現れ、しかも個人のキャリア追求の必要が再参入のタイミングを規定する傾向がさらに強まる（すなわち、末子が1~2歳時でもキャリア追求

の必要から再参入を行う)、というシナリオを予測することも可能である。

このうちのどちらのシナリオが優勢か、あるいは別のシナリオが可能なのかについては、現在のデータでは即断できない。今後も観察を続けていく必要があるだろう。

## 7. おわりに

本稿では、女性の労働市場への再参入に関して、50-60歳コーホートから40歳コーホートへの変化は、「多様性から画一化へ」「家族と個人による調整から家族と産業による調整へ」「フロンティアから制度化へ」ということができるのではないかという議論を行った。また30歳コーホートについては、2つのシナリオを予測としてあげたが、今後実際にどうなっていくのかについては、現時点では判断できなかった。

最後に、今後の課題について述べたい。本稿の分析は、探索的分析であり、今後検証すべき仮説を提示するという性質のものである。というのも、たとえば本稿では、クロス表を中心に2変数間の関係を見る分析しか行っていないために、第3変数の影響が十分にコントロールされていない。またコーホートごとの分析を行ったために、ケース数が不足している分析もある。したがって、本稿で提示した仮説は、今後、上記のような点を踏まえた分析で検証されねばならないだろう。

### 【参考文献】

- 石原邦雄、1987、「研究目的、概念、研究方法」、森岡清美・青井和夫(編)『現代日本人のライフコース』、日本学術振興会
- 上野千鶴子、1994、「女性の変貌と家族」、『近代家族の成立と終焉』、岩波書店
- 牛島千尋、1995、『ジェンダーと社会階級』、恒星社厚生閣
- 岡本英雄・直井優・岩井八郎、1990、「ライフコースとキャリア」、岡本英雄・直井道子編、『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』、東京大学出版会
- 木本喜美子、1995、「家族と〈企業社会〉の現在」『家族・ジェンダー・企業社会』、ミネルヴァ書房
- 雇用職業総合研究所、1988、『女性の職業経歴—1975年、1983年「職業移動と経歴(女子)調査」再分析—』、52-101頁
- 日本労働研究機構、1993、「女子再就職者の実態」、『女子再就職の実態に関する研究』
- 森岡清美・青井和夫(編)、1985、『ライフコースと世代』、垣内出版
- 森岡清美、1988、「女性ライフコースの世代間および世代内葛藤」『社会学評論』第39巻第3号、230-237頁
- 山田昌弘、1994、『近代家族のゆくえ』 新曜社
- 大和礼子、1995、「愛情とお金の間——現代家族再考——」、三木英・藤本憲一(共編)『社会を視る12の窓』、学術図書出版

- Allan, G., 1985, *Family Life*, Blackwell, Oxford
- Berger, P., Berger, B., and Kellner, H., 1972, *The Homeless Mind*, Random House Inc. New York (=1977、高山真知子ほか訳、『故郷喪失者たち』、新曜社)
- Elder, G. H. Jr., 1977, "Family History and the Life Course", *Journal of Family History*, 2(4):279-304.
- Elder, G. H. Jr., 1974, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, University of Chicago Press, Chicago and London (=1986、本田時雄ほか訳、『大恐慌の子供たち——社会変動と人間発達——』、明石書店)
- Hareven, Tamara K., 1982, *Family time and industrial time*, Cambridge University Press, New York (=1990、正岡寛司監、『家族時間と産業時間』、早稲田大学出版部)
- Litwak, E., 1965, "Extended kin relations in an industrial democratic society" in Shanas, E. and Steib, G. F. (eds.), *Social Structure and the Family*, NJ, Prentice-Hall, Englewood Cliffs.
- Modell, J., Furstenberg, F. and Hershberg, T., 1976, "Social Change and Transition to Adulthood: Historical Perspective", *Journal of Family History*, 1(Autumn):7-32